

第42回 全日本仏教徒会議  
和歌山・高野山大会紀要



WAKAYAMA  
KOYASAN

# 宗教と環境

自然との共生



高野山町石道

第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会

2013年10月16日(水) 17日(木)

メイン会場：高野山大学黎明館

主催：和歌山県仏教会/高野山真言宗・総本山 金剛峯寺/公益財団法人全日本仏教会

## 深奥なる自然と共に生き、祈る——

「今、禅經の説に准(なずら)うに、深山の平地、もっとも修禪によろし」。1200年前に弘法大師空海が高野山の下賜を朝廷に上奏された際の文章には、原生の自然に向き合い観法することの深い意義が説かれています。私たちが現代の社会や文明と付き合っていくヒントも、このような自然と共に生かし合い、生きていく道を考えることに見出せるのではないのでしょうか。紀伊山地の奥深く、今なお巨樹の林に囲まれた伽藍には、あらゆる生命とのつながりを感じられるような空気が流れています。



## 序文

紀要刊行にあたっての  
ご挨拶

「内八葉外八葉」の蓮台のような峰々に囲まれる標高千メートル近い高野山にはうっそうとした杉や檜などの巨木林が広がり、7年前、近畿で初の「森林セラピー基地」に認定されました。そこで得られる「森林浴効果」の一つはあらゆる生き物のいのちのつながりを実感できることにあるそうですが、その高野山で開かれた第42回全日本仏教徒会議和歌山・高野山大会のテーマが「宗教と環境—自然との共生—」でした。高野山大学黎明館を主会場に参加七宗派による初日の合同法会に始まり、一般の参詣者も参加できる瞑想・写経体験や声明ライブやナイトツアーなど、二日間にわたる盛りだくさんのプログラムに、お越し下さった子どもから年配の皆さんにまでご満足いただけたことと存じます。

中でも二日目の今大会テーマを表題に掲げたシンポジウムでは、日本の第一線で活躍される有識者、宗教者たちが、科学技術が進み物質的には恵まれる一方で深刻な環境破壊に見舞われている現代が抱える問題について自由闊達に意見を交わされました。特に印象に残ったのは、あらゆる生きものはことごとく仏になるべき性格を備えていると説く大乘仏教の「一切衆生悉有仏性」という言葉が繰り返し強調されたことでした。草木などの植物はもちろん、山や川といった物体にまでいのちがあるという思想は、仏教以前から日本人の自然観の中で育まれてきたのではないかとされます。

仏教徒がこれまで絶えず保持し続けてきた「輪廻転生」の考え方は、人間のいのちが遠い過去から遥かな未来にまで地球上のあらゆるいのちと不可分につながっていくこととされています。とすれば、現代の厳しい環境問題は、科学技術による精一杯の対策とともに、宗教の立場からも解決に向けた積極的な提言を発信し続けることが求められるのではないのでしょうか。熱心に展開された基調講演やパネル討論の興奮が冷めやらぬまま会場を出て杉林の秋の木漏れ日の中を歩きながら改めて「自然との共生」の意味を噛みしめました。

今大会の主催、運営、支援に携わって下さったすべての団体・個人、参加していただきました皆さまに心からお礼申し上げます。ありがとうございました。合掌

平成26年4月  
第42回全日本仏教徒会議  
和歌山・高野山大会事務局

## 目次

### 《ご挨拶・祝辞》……………P.6

(公財)全日本仏教会会長 半田孝淳  
高野山真言宗管長 松長有慶  
(公財)全日本仏教会副会長 前田定戒  
WFB(世界仏教徒連盟)会長 パン・ワナメッティ

### 《大会テーマ》……………P.10

### 《大会日程》……………P.11

### 《和歌山・高野山大会の2日間》

#### [第1日目] ……P.12 受付

開会式  
合同法会(全体法要の次第)  
加盟団体交流懇親会

#### [第2日目] ……P.16 シンポジウム

記念式典(大会宣言文)

### 《体験プログラム》……………P.18

座禅会(瞑想)  
声明ライブ  
伽藍ナイトウォーク  
写経  
ブッディストホーム・釈迦の手  
森林セラピー

### 《ブース》……………P.20

### 《シンポジウムの記録》……………P.22

記念法話  
基調講演  
パネル討論

### 《掲載紙から》……………P.42

### 《一覧》……………P.44

協賛団体  
公益財団法人全日本仏教会役員  
公益財団法人全日本仏教会加盟団体  
第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会実行委員



## 第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会

「宗教と環境－自然との共生－」  
開催に寄せて

公益財団法人  
全日本仏教会会長  
天台座主

半田 孝淳

このたび第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会が「宗教と環境－自然との共生－」のテーマのもと開催の運びとなり、公益財団法人全日本仏教会会長として一言ご挨拶申し上げます。

平和と生命の尊厳という仏教の根本理念と申すべき精神を掲げ、その実現に向け、我が全日本仏教会も努力を重ねて参りましたが、現今のシリアでの情勢をあげるまでもなく、未だ世界では紛争も止まず、心痛む限りであります。

さらに、そうした政治上の混沌に加え、現代においては、環境破壊の問題が取り沙汰されております。即ち、近代以降の科学技術の発展により、物質的な繁栄が築き上げられてきましたが、その負の面があらゆるところで露出してきてきたことであらうでしょう。これは、単に地域、国家の問題ではありません。

この人為による環境破壊、環境汚染の問題は、いまや全世界、全人類の課題となっております。我が日本におきましても、原発事故問題による環境汚染、温暖化の影響とされる豪雨竜巻など異常気象に悩まされております。

私共には「山川草木悉皆成仏」というみ教えもございます。私たち人間もあらゆる生き物は等しく仏の心を抱き、全ての命は平等なのであります。技術文明の行く先を憂う今、地球上のあらゆる命と共に生きる道を探さねばなりません。私たち仏教徒ひとり一人がこの課題に取り組まねばならないという思いを今大会の「宗教と環境－自然との共生－」の場において明らかにし、さらに世界に向けて発信しようではありませんか。

自然との共生というテーマを掲げる今大会が、新たな未来への一步を築く大きな成果を生み出してくれることを祈念して、ご挨拶とさせていただきます。



## 第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会開催について

和歌山・高野山大会大会長  
高野山真言宗管長  
総本山金剛峯寺座主

松長 有慶

この度の全日本仏教徒会議第42回大会開催に際して全国から数多くの仏教徒が霊山の高野山に登嶺され盛会裡に開催される運びとなりました。

昭和28年8月に第1回全日本仏教徒会議が開催されましたのもこの高野山であり又、本年は第1回より星霜流れ丁度、還暦に当たる60年という節目にも当たります。不思議なご縁を感じると共に改めて全日本仏教会発展に寄与された先人の永年に亘るご苦勞に敬意を表します。

紀州・和歌山には天野・熊野等の霊地が御座いますがその中でも高野山は古来より天下の霊場として宗教・宗派の垣根を越えて信仰を聚めて参りました。この御山は弘法大師がお開きになられた平成27年に1200年の記念の年を迎える悠久の歴史を有しております。大師は深山幽谷のこのお山の自然そのものが極楽浄土の現れであり「法身の里」と名付けこよなく愛され又、未来永劫に亘って生きとし生けるものの幸せを祈り続けられています。

しかしながら現代でも人間の傲慢さによる自然破壊と科学万能主義による弊害が後を絶たず、あまつさえ今日でも戦争、テロリズムが益々、跋扈して無辜の市民が殺傷されている事は悲しい限りであります。記憶に新しい東日本大震災により尊い人命が失われ被災地の復興も遅々として進んでおりません。

この度の大会テーマは「宗教と環境・自然との共生」でありまさしく時に従い機に応じて開催された大会であります。本大会を機に私共、仏教者が社会・自然に対してどのような貢献が為しうるのかをメッセージに託して世界に訴えたいと念願する次第であります。

合掌

## ご挨拶



公益財団法人  
全日本仏教会副会長  
和歌山県仏教会会長

前田 定戒

このたび「第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会」を「宗教と環境－自然との共生－」をテーマに開催致します。昨今の異常気象、自然災害、原発事故また、世界各地の紛争等末世を思わせるとき、我が仏教徒は何をなすべきか、何が出来るのか、改めて考えるときであります。

このときに当り高野山真言宗管長松長有慶猊下の御発案によります大会テーマは時宜を得たものと考えます。

大会を通じて、シンポジウムでの諸大徳の御意見を心にきざみ「合同大法会仏教徒のつどい」での祈りが世界平和、災害復興、被災物故者の追善に届くことを信じます。全国各地から高野山の聖域に御参集下さった僧俗ともにこの2日間の体験を意義のあるものとして、今後の信仰生活に生かされることを望みます。

尚、今大会に協賛いただいた諸大徳、各企業様に深甚の謝意を表します。

又、企画、運営、会場等諸般にわたり御尽力いただいた高野山関係機関並びに諸師に御礼申し上げます。

## 祝 辞



WFB(世界仏教徒連盟)会長

パン・ワナメツテイ

この度は第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会の開催に際しまして、全日本仏教会会長であられる半田孝淳猊下に心よりお慶び申し上げます。またWFB(世界仏教徒連盟)代表として、パロップ・タイアリー事務総長を今回お招きいただきましたこと、WFB、及びWFB各国地域センター、関係団体に成り代わり、謹んで御礼申し上げます。

仏教の聖地であり、またユネスコ世界遺産に登録されている高野山にて今大会が開催されますことは、我々WFBが力を注いでおります「宗教、自然、環境、人間の調和」とその意を共有していると存じます。高野山は真言宗の本山であると同時に、日本そして世界の仏教伝道、仏教教育の中心でございます。

私たち人間は自然と共生しています。人間が環境を害すれば、やがてそれは私たちにも害となるでしょう。人間の行いが多くの環境問題を生んだということ、皆私たちは知っています。そこで私たちは、環境破壊の様式を軽減し、生産的、協力的関係を自然との間に構築する解決策が仏教の中にあるのではないかと存じます。中道を行くという教え、そして執着から全ての苦しみがうまれるという教えに基づき、私たち仏教徒は生活しています。「宗教と環境－自然との共生－」というテーマのもと今大会が開催され、その結果得るものが具体的であるか否かはともかく、人間以外の生きとし生けるもの、環境、自然との共生は明らかに人類にとって有益であり、そういった考えが今大会で高まることを願う次第でございます。

また、全日本仏教会様におかれましては、仏教伝道という私たちが共有する目的に向かって人類の平和と幸せのため集い、力を合わせて活動してこられた永きにわたる実績、そして模範的貢献に対し、WFB会長の立場から心よりお慶び申し上げます。

最後になりましたが、仏教、文化、人類の大いなる発展のために、より一層の相互協力のなか、全日本仏教会様と親密に今後とも取り組んでまいりたいと考える所存です。

このお慶びの場におきまして、今大会参加者の皆様のご成功をお祈り申し上げます。

三宝のご加護によって、皆様に健康と幸福が賜われますようご祈念申し上げます。

(原文英文)

## 大会テーマ

## 宗教と環境 —自然との共生—

豊かな自然に包まれた地であり、日本人の信仰の礎ともいえる歴史や文化が息づく和歌山において、大会テーマを【宗教と環境—自然との共生—】として「第42回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会」を開催いたします。

今大会のシンポジウムでは「宗教と環境」をテーマとして、宗教者並びに有識者のご意見を賜ります。

近代以降急速に発展し続けている科学技術により、物質的に恵まれた日常生活が可能となりました。しかしながら、その結果、現在地球上の資源が枯渇に瀕し、大気汚染が進み、異常気象が常態化する事態を招いております。

—昨年東日本を襲った大地震、大津波とそれに伴う原子力発電所の大事故を経験し、ようやく歯止め無く物質的な恩恵を享受し続ける従来の生活を根本的に変革することなくして、希望ある未来は約束されないと気付きはじめました。

このような社会状況の中、「現代文明・人・自然」が互いに調和し、共に生かしあい生きていく道を考え、いかに次世代へ継承していくのかを、日本人が永年にわたり培ってきた「教え（宗教・信仰）」の中に見出し、発信していきたいと考えます。

## 大会日程

第1日目／10月16日(水)

第2日目／10月17日(木)

第1日目 10月16日(水) 会場:高野山大学黎明館

12:30~13:00 開会式

14:00~16:30 加盟宗派及び都道府県仏教会・仏教団体代議員会議開催

13:30~17:00 合同法会「全日本仏教徒のつどい」

〈第一部〉13:30 双盤念仏〔西山浄土宗 地藏寺誦講〕

13:55 吉水流詠唱〔浄土宗 吉水講和歌山教区本部〕

14:20 御詠歌〔高野山真言宗 高野山金剛流合唱団〕

〈第二部〉15:20 仏教讃歌コーラス〔浄土真宗本願寺派 かりょうびんが鷲森〕

15:45 祈願法要〔日蓮宗・法華宗〕

16:10 曹洞宗法要〔曹洞宗 曹洞宗和歌山県管内寺院〕

16:45 全体法要

18:30~21:00 加盟団体交流懇親会

第2日目 10月17日(木) 会場:高野山大学黎明館

10:00~12:30 基調講演 シンポジウム

大会テーマ「宗教と環境—自然との共生—」

[記念法話]〈開会挨拶〉高野山真言宗管長 松長 有慶 祝下  
総本山金剛峯寺座主

[基調講演]〈講演〉武田 邦彦

[シンポジウム]〈コーディネーター〉竹村 牧男

〈パネリスト〉武田 邦彦 大河内 秀人 村上 保壽

12:30~13:00 記念式典

## 体験プログラム

両日／10月16日(水)17日(木)

ナイトツアー、声明ライブは16日(水)夜のみ。

座禅会(瞑想)

写 経

ブッディストホーム・釈迦の手

伽藍ナイトウォーク

声明ライブ

森林セラピー

# 和歌山・高野山大会の2日間

第1日目/10月16日(水)



## 受付

高野山大学松下講堂黎明館をメイン会場に約500名の方々が参加。受付はJTB、高野山観光協会、金剛峯寺職員にご協力頂き、開会時間まで全日本仏教会役員の方々は控室で寛がれた。



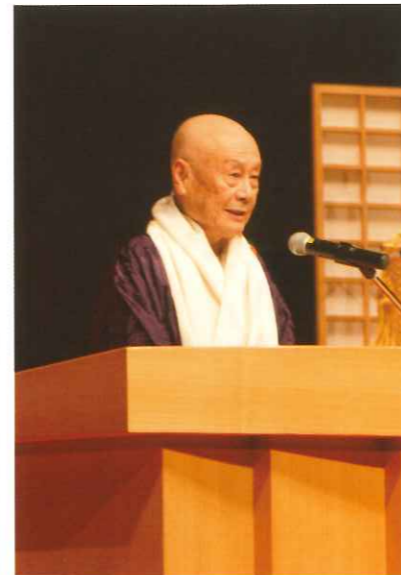
## 開会式

今大会の大会長である高野山真言宗管長松長有慶猷下が開会の挨拶で、「私たちが社会や自然に対してどのように貢献できるかを考え、世界に向けて発信したい」と述べられた。仏教徒の歌の後、全日本仏教会会長の半田孝淳天台座主猷下は大会挨拶で「自然の中で生きている喜びを分かち合い、真の豊かさとは何かを学び合おう」と呼び掛けた。続いて来賓並びに役員紹介が行われ、WFB(世界仏教徒連盟)のパナ・ワナメッティ会長の祝辞が全日本仏教会国際部鈴木部長より代読された。

大会宣言文起草委員については全日本仏教会の半田孝淳会長、松長有慶大会長、全日本仏教会の前田定戒副会長が務めることが紹介され、日程説明の後、閉式となった。



(公財)全日本仏教会会長 半田孝淳猷下



和歌山・高野山大会大会長 松長有慶猷下



## 合同法会

「全日本仏教徒のつどい」として和歌山県下寺院7宗派による法要や御詠歌・仏教讃歌コーラスが披露された。後半は全体法要として各宗派代表によって「三帰依文・四弘誓願・願文・帰命句・廻向句」の次第で執り行われた。

### 第一部



双盤念仏 [西山浄土宗 地藏寺鉦講]



吉水流詠唱 [浄土宗 吉水講和歌山教区本部]



御詠歌 [高野山真言宗 高野山金剛流合唱団]

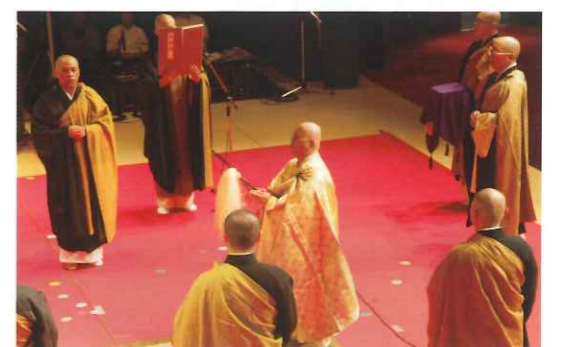
### 第二部



仏教讃歌コーラス [浄土真宗本願寺派 かりょうびんが鷺森]



祈願法要 [日蓮宗・法華宗]



曹洞宗法要 [曹洞宗 曹洞宗和歌山県管内寺院]



## 全体法要の次第

### 三帰依文 ※宗派により読み方が異なります。

人身受け難し、今已に受く。  
 佛法聞き難し、今已に聞く。  
 この身今生に於いて度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。  
 大衆諸共に至心に、三寶に帰依し奉るべし。

自ら佛に帰依し奉る。  
 まさに願わくば衆生とともに、大道を体解して無上意を撥さん。  
 自ら法に帰依し奉る。  
 まさに願わくば衆生とともに、深く経蔵に入りて智慧海の如くならん。  
 自ら僧に帰依し奉る。  
 まさに願わくば衆生とともに、大衆を統理して一切無碍ならん。

### 四弘誓願

衆生無辺誓願度(しゅじょうむへんせいがんど)  
 煩惱無尽誓願断(ぼんのうむじんせいがんだん)  
 法門無量誓願学(ほうもんむりょうせいがんがく)  
 仏道無上誓願成(ぶつどうむじょうせいがんじょう)



全体法要



### 願文

敬って三世常住浄妙如来、殊には釈迦牟尼善逝、別っては弘法大師に白して言さく。  
 伏して惟るに大恩教主釈迦牟尼世尊、法身応現の靈尊なり。  
 聖教を弘め五濁悪世に苦しむ万民を濟わんと八萬四千の法門の経説を遺し給えり。  
 加之、衆生に利益を施すこと三世に休むことなく教化の方便、十方に限りなし、仰ぐべし。尊ぶべし。然りと雖も仏法は人によって弘まり人は仏法を待って昇る。本日、靈峰高野山に全国より仏教徒、参集し第四十二回全日本仏教徒大会、和歌山・高野山大会を開催し仏徳を讃歎し各宗祖師先徳の恩徳に報謝し奉り最勝最尊の教法を伝えんとす。  
 翻って現時世相を見るに道は廃れ義は衰え社会の混迷、益々深まり、自然破壊は止まりを見せず。此の時にあたり千二百年の往昔、弘仁七年に弘法大師、御開創給える靈地、高野山にて「宗教と環境 自然との共生」をテーマに本大会を開筵するは寔に時宜に応じた盛業なりと云うべし。仰ぎ願わくば仏祖 釈迦牟尼如来を始め奉り日本仏教各宗祖師、本日の盛典を嘉納し萬代に渡り衆生に慈眼を垂れ給わんことを重ねて乞う  
 国家安穩 仏教興隆 風雨順時 五穀豊饒  
 万邦協和 諸人快樂 詣参諸衆 息災延命  
 乃至法界 平等利益

維時 平成二十五年十月十六日  
 第四十二回全日本仏教徒大会、和歌山・高野山大会大会長  
 総本山金剛峯寺座主 大僧正 松長有慶 敬白

### 帰命句

南無大師遍照金剛  
 南無阿弥陀佛  
 南無妙法蓮華經  
 南無釈迦牟尼佛



### 廻向句

願わくは この功德をもって 普く一切に及ぼし  
 我らと衆生と 皆共に 仏道を成ぜん

## 加盟団体交流懇親会

午後6時30分からは、高野山大学体育館に会場を移し、懇親会を開催した。懇親会は全日本仏教会役員を始め全日本仏教会加盟団体、和歌山県下寺院だけでなく、協賛団体も加わって、約200名が参加し、リーガロイヤルホテル大阪の料理で立食形式にて行われた。

初めに添田隆昭大会実行委員長が開会の辞を述べ、来賓の宮林昭彦(公財)全日本仏教会副会長が挨拶。続いて小林正道(公財)全日本仏教会理事長の乾杯の発声で開催した。

また、余興として「四郷千両太鼓」の和太鼓と「紀の国やっちゃんまかせ」舞踊が披露された。閉会の辞は前田定戒(公財)全日本仏教会副会長が務め、懇親会は開きとなった。



開会の辞



来賓祝辞

和歌山・高野山大会実行委員長 添田 隆昭 (公財) 全日本仏教会副会長 宮林 昭彦



乾杯発声  
 (公財) 全日本仏教会理事長 小林 正道



和太鼓(四郷千両太鼓)



舞踊(紀の国やっちゃん)



閉会の辞  
 (公財) 全日本仏教会副会長 前田 定戒

## 和歌山・高野山大会の2日間

第2日目/10月17日(木)

今大会のメインプログラムであり、大会テーマの「宗教と環境—自然との共生—」を主題とするシンポジウムが午前10時から高野山大学松下講堂黎明館で開催された。厳かな真言密教の荘厳がなされたステージに、初めに登壇された高野山真言宗管長の松長有慶陛下を約300人の聴衆が拍手で迎えた。

松長陛下は開会挨拶を兼ねた法話で「環境問題の中でも私たちが次世代に何を残すのかという“世代間の倫理”がいま問われている」と強調された。特に「一切衆生」「山川草木悉有仏性」という仏教本来の思想が現代の環境問題のカギになるというご指摘が客席に感銘を与えた。

続いて中部大学教授の武田邦彦氏が資源学などを専攻する科学者として独自の視点から東日本大震災から原子力発

電所の問題、石油・石炭・天然ガスなどの資源、さらにダイオキシン、地球温暖化などについて自説を展開された。テレビなどのコメンテーターとしても活躍中の武田氏の積極的な語り口が聴衆を魅了した。

シンポジウムの後半は東洋大学学長で仏教哲学者の竹村牧男氏をコーディネーターに大会テーマを掘り下げる討論が繰り広げられた。パネリストは基調講演の武田氏のほか、浄土宗見樹院・寿光院住職でアジア地域などでの国際協力NGOに参加したり、仏教者として平和・人権・環境活動などに取り組んだりしている大河内秀人師、『空海のこころの原風景』などの著書でも知られる高野山大学名誉教授の村上保壽師が参加した。大河内師は「縁起」の世界でみんなが幸福に生きるにはどうすべきかを論じ、村上師は「いのちのつながりの大切さを説き続けることの大切さ」を強調された。武田氏は「真の科学のこころを研究者に求めることを通して環境問題を訴えたい」と熱弁。竹村氏は各パネリストの論点を踏まえ、「仏教の中から現代人にとっての生き方の指針を定義し、共生の実現に向けて努力していく中で環境についても考えていきたい」とまとめられた。

## 記念式典

シンポジウム終了後、午後0時30分から同じ会場で、大会を締めくくる記念式典が催された。開式の辞を大会副総裁の北河原公敬(公財)全日本仏教会副会長から賜り、続いて「三帰依文」の経頭をお務めいただいた。さらに横田南嶺(公財)全日本仏教会副会長の挨拶に続き、今大会の実行委員長を務めた添田隆昭高野山真言宗宗務総長が大会宣言文を読み上げた。最後に萩野映明(公財)全日本仏教会副会長より次回の開催地、愛媛県の御木徳久同県仏教会会長へ会旗が手渡され、今大会の事務局長を務めた山口文章高野山真言宗山林部長の閉会の辞をもって終了した。



大会挨拶  
(公財)全日本仏教会副会長 横田南嶺



閉会の辞  
大会事務局長 山口文章



開会の辞  
(公財)全日本仏教会副会長 北河原公敬



大会旗返還  
(公財)全日本仏教会副会長 萩野映明/愛媛県仏教会会長 御木徳久

## 大会宣言文

私達のいのちは自然環境と密接不可分の関係にあります。私達人間の心が垢ればそれに従い環境は垢れ、逆に環境が調和を保てば、それに従い私達の心も落ち着き、朗らかになってまいります。

第二次大戦以後、驚異的な科学技術の進歩により私達は物質的に豊かな生活を享受してきました。しかしその原資は地球上の有限な資源であるにもかかわらずそれらを湯水の如く消費し、枯渇の危機を招き、あまつさえ近未来には海底資源まで触手を伸ばそうとしています。

最近発表されたIPCC(気候変動に関する政府間パネル)報告書でも地球温暖化の進行は人為的原因によることが強調されています。自然環境にも危機的な状況をもたらし、オゾン層の破壊、海面の上昇、干魃、ゲリラ豪雨等により世界的に甚大な被害を蒙っているのは、その顕著な例であります。また急速な工業化による深刻な大気汚染が常態化し、人々の健康を蝕む事態をも招いています。

私達は、東日本大震災という未曾有の大惨事を経験いたしました。とりわけ原子力発電所の放射能汚染の影響もあり、被災地の復旧は遅々として進まず、大自然の脅威の前に如何に人間が無力かを痛感させられました。この大惨事は日頃の生活を根底から見直し、物質的に豊かな生活よりもさらに大切なものがあることに気づかせてくれる、自然からの警告であります。石油、石炭などの化石燃料も、

過去に存在したいのちが悠久の時を経て私達に恩恵を与えてくれております。しかしそれらは有限です。私達の時代だけで枯渇させることなく、未来にも残し伝えねばなりません。

便利で快適な生活を求めるのも根源的な生命力としての欲であります。しかしその欲を我欲にとどめず、質を変え他の命を生かし、大切にするために使う利他の行動が現代に求められています。

私達は自然から大きな恩恵を受けているのも事実であります。古来より日本人は森羅万象の中に聖なるものを見出し「神・仏」として崇拜し、保護し、共存してきました。その智慧を共有する仏教各派が釈尊の教えの下に一致団結し、叡智の科学とも手を取り合い、日本ひいては世界中にその思想を発信し、さらなる環境破壊を阻止すべく自然との共生の実現を誓い大会宣言と致します。

平成25年10月17日  
第42回全日本仏教徒会議  
和歌山・高野山大会 実行委員会



和歌山・高野山大会実行委員長 添田隆昭

## 体験プログラム

両日／10月16日(水)17日(木)  
声明ライブ、ナイトツアーは  
16日(水)夜のみ。

### 座禅会(瞑想)

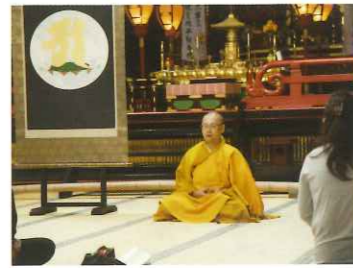
16日、17日とも午前9時半、11時半、午後1時半、3時半からの各4回ずつ3会場に分かれて催されました。



**臨済禅**  
高野山大学の武道場で実施されました。人感を受けない「無依の道人」を目指すことされる臨済宗ならではの厳しい「喝」によって活気を引き出す張りつめた空気が会場にみなぎっていました。



**曹洞禅**  
高野山大学の加行道場を会場に行われました。中国曹洞禅の正脈である「只管打座」の禅で知られる曹洞宗の環境を体験しようという熱心な参加者が詰めかけ、真剣な表情で取り組んでいました。



**阿字観**  
大師教会大講堂で開かれましたが、真言密教の根本経典『大日経』と『金剛頂経』に基づく即身成仏の実践法で、混迷を深める現代社会で改めて見直されており、各回とも多くの皆さまが参加されました。

### 声明ライブ

16日午後8時から大師教会中講堂を会場に、高野山に伝わる密教音楽「声明」が高野山真言宗の青年僧ら13人によって厳かに披露されました。散華に始まり、對揚、唱礼から前讃、理趣経(百字偈)、後讃、唱名礼まで1時間にわたって繰り広げられました。参加者たちは普段なじみのない荘厳な旋律に間近に接し、深い感銘を受けていました。



### 伽藍ナイトウォーク

「自然との共生」を感じ、考えてもらうため、昼間とは異なる表情を見せる高野山上の伽藍を巡る夜間のツアーを企画。初日の16日午後7時に大師教会に参集した人たちは、暮れなずむ蛇腹道から東塔や不動堂、大塔、金堂、中門、西塔、さらに三鉢の松から御影堂までを約1時間かけて歩きました。巨木に覆われた各諸堂が暗闇の中から次々と浮かび上がる姿に参加者たちは厳粛な思いを新たにしました。



### 写経

両日の午前9時から午後3時半まで随時、大師教会の写経室で開かれました。『般若心経』の書写は祈願の心を持って行うことで功德となると言われます。定員28名とされる室内で参加者たちは合掌・礼拝して写経願文を唱え、心静かに墨をすって、1字ずつ心を込めて筆を進めた後、心経読誦などをしていました。



### ブディストホーム・釈迦の手

両日の会場となった「高野山霊木之家」は、弘法大師が唱えられた「共利群生」の思想に基づき生物多様性を象徴する森の形成・継承を目指して高野霊木(杉材)を主体に建てられました。まさに今回の大会テーマ「自然との共生」を具現した建物です。ここで普段は体験できない各宗派の僧侶と身近に接したり、展示された袈裟や法具を見学したりしてもらいました。



### 森林セラピー

両日の午前9時半からと午後2時からの計4回、高野霊木之家に集合後、実施されました。森林セラピーは樹木の中を歩いてその癒し効果で健康増進や予防医学に役立てられると注目され、高野山は6年前に近畿初の「森林セラピー基地」に認定されています。参加者たちは今大会の表題「宗教と環境」にちなんだ法と話を聞いた後、一の橋から弘法大師御廟、中の橋駐車場までの約3キロのコースをゆっくり2時間かけて歩きました。

# ブース

両日/10月16日(水)17日(木)

全日本仏教会、曹洞宗、その他各企業のブースが設けられた。初日は台風の影響もありメイン会場内にブースを設置。

大会2日目は天候が回復したため、テントにブースを移し来場者を出迎えた。



メットライフ アリコ



株式会社イシダ



株式会社メルシー



リコージャパン株式会社



株式会社金剛組



株式会社高野山出版社



高野町



公益財団法人全日本仏教会



曹洞宗務庁出版部



株式会社大阪レンタル



株式会社大入



大和証券株式会社和歌山支店



東映株式会社



株式会社日吉屋



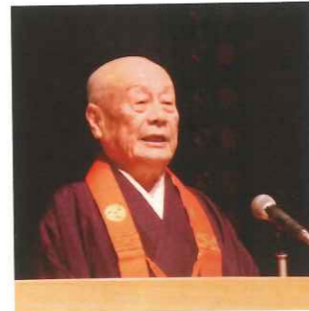
有限会社高野

## シンポジウムの記録

### 記念法話

和歌山・高野山大会大会長  
高野山真言宗管長  
総本山金剛峯寺座主

松長 有慶



## 「生けるものすべて つながりあう」

環境問題はこれからの日本のみならず世界が抱える非常に大きな問題であります。仏教徒として今後これにどのように関わりを持つかということは、重要なテーマになってくるだろうと考えております。そのキーポイントとなるのは、従来の人間中心的な考え方からの転換だと私は考えます。環境問題と言えば、1972年にストックホルムで開催された国連の人間環境会議が世界から注目された一つのきっかけですが、日本でもその前から、四日市公害とか、水俣病とかの問題で環境についての関心が少しずつ持たれてきました。世界的な時代の流れとしても、科学技術文明の限界が明らかにされ始め、いろいろな議論が出てきた時代ですが、我々の社会はまだ自然破壊、環境保全の問題を深刻に考えていると言えなかったと思います。

私にとって環境問題の中で注意を引いたのは、世代間の倫理を加藤尚武さんが発言されたことです。今まで倫理というのは、同時代の親子や地域社会の人間同士の関係の中で考えられるのが普通だと思っていたのが、世代間の倫理というものがあり、今の時代が次の時代に対して何を残すか、あるいはマイナスの遺産を残すのではということが提起されたのです。

最近、私に関心を持った書物として、ロデリック・F・ナッシュの『自然の権利—環境倫理

の文明史』があります。アメリカで出版されたのは1989年、日本では2011年に翻訳されました（松野弘訳、ミネルヴァ書房）。その中に西洋社会における環境問題についての取り扱いの歴史も非常に詳しく書かれております。そこで私が気になりましたのは、一神教の社会の中で環境問題には神に対する敬意を払わなければならない、あるいは神を抜きにしては環境問題を論じられないということです。同時に、逆に言えば日本では一神教の社会にあるような神の問題はそれほど問題にならずに、もっとストレートに環境問題について宗教が後押しできるのではないかということでした。それは何かと申しますと、西洋社会における一神教の考え方、神のもとに人間があり、そして人間同士は平等ではあるが、動物、植物は人間のためにあるという考え方が根強い社会だということです。それに対して仏教には「一切衆生」という考え方がある。この考えかたは環境問題を論ずる場合に仏教のかけがえのない特長になります。

一切衆生というのは、サンスクリット語で「サトバ」というのですが、英語で言うとbeという動詞、存在するという動詞の名詞形であり、仏教では「存在するもの」という意味になります。ですから、これは人間だけではなくて動物、植物すなわち地球上に存在するものすべてが「サトバ」に入るということです。当然、人間も動物も同じ命を共有するという考えを仏教はもともと持っているということでもあります。

ただし、一切存在するものと言いましても、仏教の中では植物に命があるかどうかという問題はいろんな形で議論されてきたようです。中国仏教でもこの問題が取り上げられて、衆生というのは有情と訳されることもあり、あるいは有情に対して非情—命を持たないものということになります。こういった意味で衆生あるいは有情という言葉を使いながら、その言葉の中で植物つまり非情に命があるかないかという問題が論議されてきました。中国仏教ではこの両説があったようです。しかし、植物に命があるという見解も認められるようになってまいりました。

日本では「山川草木悉有仏性」という言葉があり、天台宗独特の考え方のように言われておりますが、この言葉は天台宗の文献の中には確かな形では存在していません。でも台密の学者としても有名な安然（9世紀）には「草木国土悉皆成仏」という言葉が確かにございます。「草木国土悉皆成仏」となると、植物に命があるかどうかというだけではなく、国土すなわち命がないと思われる石ころや空気あるいは風という無機物にも命があり、みんな成仏するんだという考えになってきます。これは非常に大きな転換であろうと思います。こういった、中国仏教にもなかった鉱物など我々が普通命がないと思われるようなものの中に命を認める考え方が日本仏教の中に初めて現れたということです。

ダライ・ラマ殿下はたびたび日本においてになり、私もいろんな形で毎年お話をさせていただいております。ダライ・ラマ殿下とは仏教の考え方で同意する点が多いのですが、一つ意見がどうしても折り合わないのは、石に命があるのかという考え方です。いわゆる無生物に命があるというのは日本仏教の考え方であって、ダライ・ラマ殿下は絶対それを認めようとされません。命を持つもの、いわゆる「有情」は命を持ち、それ以外の「非情」には命を認めないという考えはインド仏教の流れを忠

実に継いでおられると思います。

そういう意味では、水にも鉱物にも石ころにも命があるという考え方は日本仏教独自のものです。仏教の中だけではなく日本古来の信仰といえますか、神道の考え方の影響も非常に強いのではないかと思います。日本語の「もの」という言葉が、「物」という字と「者」という字の両方に分かれているということは、日本人のメンタリティーはやはり「物」にも命があるという考え方なのではないでしょうか。日本仏教もこうした日本古来の民族信仰をそのまま取り入れて、「物」に命があるという考え方が普遍化していったと考えております。

もともと日本人が自然に対して持っていた「山川草木悉有仏性」という考え方は、文献としては実際に見出せないとしても、「草木国土悉皆成仏」という命あるものにも、ないものにもすべて命があり、みんな成仏するのだという考え方が天台宗にある。同じように真言宗の中にもあるのですね。探してみますと、弘法大師空海の『卍字義』の中に「草木また成らず、如何にいわんや有情をや」、あるいは大師の『性霊集』に各種の願文というのがあり、法事をしたり、写経をしたりという善行によって何を願うかというところの最後に書かれているのが、動物、植物、すべての命あるものが等しく成仏するように、この功德によって命あるものすべてが成仏するようにという言葉が、繰り返し使われております。

こういった平安初期ごろから有情・非情を含めて一切のものに対する命を平等に認め、それらが成仏するという考え方が日本仏教の中に入ってきた。そしてそれがいのちを考える中心的な課題となっていった。仏教の中で、ものにもすべて命がある、そしてすべての命が互いにつながりあっているという考え方が、今後さらに世界に向かって環境問題を発信していく一つの大きな理論的な根拠になるのではないかと考えております。